2023年5月7日  川越教会

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　丸山　勉

神様の前に正直に

［ローマの信徒への手紙5章1～11節］

このように、わたしたちは信仰によって義とされたのだから、わたしたちの主イエス・キリストによって神との間に平和を得ており、このキリストのお陰で、今の恵みに信仰によって導き入れられ、神の栄光にあずかる希望を誇りにしています。そればかりでなく、苦難をも誇りとします。わたしたちは知っているのです、苦難は忍耐を、忍耐は練達を、練達は希望を生むということを。希望はわたしたちを欺くことがありません。わたしたちに与えられた聖霊によって、神の愛がわたしたちの心に注がれているからです。実にキリストは、わたしたちがまだ弱かったころ、定められた時に、不信心な者のために死んでくださった。正しい人のために死ぬ者はほとんどいません。善い人のために命を惜しまない者ならいるかもしれません。しかし、わたしたちがまだ罪人であったとき、キリストがわたしたちのために死んでくださったことにより、神はわたしたちに対する愛を示されました。それで今や、わたしたちはキリストの血によって義とされたのですから、キリストによって神の怒りから救われるのは、なおさらのことです。敵であったときでさえ、御子の死によって神と和解させていただいたのであれば、和解させていただいた今は、御子の命によって救われるのはなおさらです。それだけでなく、わたしたちの主イエス・キリストによって、わたしたちは神を誇りとしています。今やこのキリストを通して和解させていただいたからです。

1. リアルな言葉

よく「神様を信じている」というと、何かおめでたい人、お花畑のような夢を心に描いている人のように思われてしまうことがないでしょうか？私たちはどこかそんな子どもっぽいイメージを持っている・持たれてしまっていると思い込み、「神様を信じている」となかなか言えないと言うことがあるかも知れません。その気持ちもよく分かる気がします。けれども、私は、神様を信じるということ、聖書が示す神様を信じるということは、極めて現実的な、リアルな生活に直結していることなんだとこの頃、特に思います。単に夢物語のようであるなら、信仰というものは生きる上で何の力にもならないでしょう。主イエス様に捕えられたパウロは今日の所で、「苦難は忍耐を、 忍耐は練達を、練達は希望を生む」（5:3～4）と語っています。パウロは、生きることの苦難や辛さを良く知っていて、その上で、キリストを信じる信仰の尊さ、かけがえのなさを語っているのですね。

皆さんはこのゴールデンウイークのお休みはどのように過ごされたでしょうか？あまり連休と関係がなかったという方もおられると思いますけれども。私はちょっと良い体験をしました。というのは、私は今誰もいなくなった実家に今後の色々な整理のためもあって独りで一晩泊まりに行ったのです。そうしたら、召された父が大泉教会でバプテスマを受けたその後だと思うのですが（70才位か）、聖書の言葉とか、榎本保郎先生の『聖書一日一章』から心に留まった所をそのまま書き写している直筆の紙を見つけることが出来ました。そんなことをしていたとは、私は知りませんでした。特に詩編の言葉を書き写していました。私は生前、父と、‟さし”で信仰のことを語り合ったことは殆どなかったなぁと少し後悔しましたけれども、それを目にしながら、父が神様と結びついていた時間の尊さや、祈りの空気のようなものを感じないではいられませんでした。父にも人知れず、生きることの苦労や試練があったと思います。人間関係も色々あったと後で聞かされたこともありました。でもその傍に、自分で開いた御言葉があった。それは今の私を励ましましたし、慰めを与えてくれるものでした。

皆さんは、そのように写経ではありませんが、聖書の言葉をそのままノートに書いてみるということをされたことはありますか？是非皆さんにお勧めしたいです。書くことは良いですね。父はメールをしなかったので、それで直筆が残ったということもありました。しかし、残すということよりも、書いているその時間が尊いのです。私も、昔、ちょっとやったことがあったことを思い出しました。そして今回またやってみたんです。ローマの信徒への手紙5章を書き写してみました。これはパウロの「手紙」ですから、パウロの心に触れるような気持にもなります。そして、書き写していて、これは本当にすごい言葉だなあと思いました。

[２] 「キリストのお陰様」

ロマ書の5章、いきなりパウロは結論から始めます。―「わたしたちは信仰によって義とされたのだから、わたしたちの主イエス・キリストによって神との間に平和を得ており、このキリストのお陰で、今の恵みに信仰によって導き入れられ、神の栄光にあずかる希望を誇りにしています。」―今、自分は、神様との間に平和を得ていて、神様との間に何のわだかまりは無いのだと言っています。まるで生まれたばかりの幼子のようです。しっかり神様の御腕に抱きとめられているような平和。それは「キリストのお陰」だと言っています。「キリストのお陰」様、という表現、いいなあと思いました。だから自分はどんな試練や苦難があっても忍耐することが出来るのだと。苦難は忍耐を、忍耐は練達を、練達は希望を生むのだとその後で語っていますよね。つまり、確かにこの地上には苦しみはあるのだと。しかし、それは神に覚えられている苦しみであり、私たちを逞しくするし、それはやがての「神の栄光にあずかる希望」に裏付けられているものなのだと語っています。この中でパウロは「私は苦難をも誇りとしている」という驚くべき言葉を残しています。なぜでしょうか？その理由は、5節にあります。「この希望は私たちを欺くこと（裏切ること）がありません！」と。

私たちにとって、神とは恐ろしい方ではありません。もちろん「畏るべき方」ではありますが、決して警察みたいな方じゃない（警察関係の方がいたらごめんなさい）。何か指摘されと思ってビクビクして生きること、それが神様を信じて生きることじゃない。私たちは、神様の前に本当にありのままに、正直になれるのです。何故か。それについてパウロは6節以降で「実に」と、キリストについて語り始めます。主キリストは、私たちがまだ真の神様を知らず、彷徨っていた時、つまり弱っている時に死んで下さったお方なんだと。まだ「不信仰・不信心な時」にと。パウロはさらにそのことを深めて語ります。8節以下です。―「わたしたちがまだ罪人であったとき、キリストがわたしたちのために死んでくださったことにより、神はわたしたちに対する愛を示されました。それで今や、わたしたちはキリストの血によって義とされたのですから、キリストによって神の怒りから救われるのは、なおさらのことです。敵であったときでさえ、御子の死によって神と和解させていただいたのであれば、和解させていただいた今は、御子の命によって救われるのはなおさらです。 」

「弱かった時」が「不信心なとき」にとハッキリと書き、さらに8節ではハッキリと「罪人であったとき」、そして10節では「敵であったときでさえ」と深めている文章です。。これはきっとパウロは自分のことを振り返りながら語っているのでしょう。自分はそんなことは思ってもいなかったけれども、実は私は神様の敵だったのだと、神様を殺す者だったのだと。それが「キリストのお陰様」で、神様との間に平和調停を結ばれたのだという訳です。これは凄いことではないでしょうか？ある牧師が言いました。この「神様の愛、それは相手の中に動機を持たない愛であります」と。つまり、人間の中には、何ら救いのために動機になり得る良いものはない。何故なら、人間は神様を無視し、まことの神を殺す神の敵対者・罪人に過ぎないのだから。それでも神様は、人間を愛したのです！ですから「神はわたしたちに対する愛を示されました。」と言っています。全く一方的な愛なのです。そして、先ほどの牧師はこのようなことも続けて言っています。―「神はそれを、私たち不信仰者のためにあえてして下さったのです。それは‟私たちのため”ですから、神は腹を立てません。「こんな不信仰な弱虫ども、こんな恩知らずは、知らない」とは言いません。むしろ私たちの罪を自らの責任として引き受け、罪・不信を自分のものとされました。十字架の神、それは私たちが罪しか見出さない時、私たちの側に立って下さる神です」と。

[３] 神様にお出来にならないことは…

神様にお出来にならないこと、それは私たち罪人を見放すことでではないでしょうか？もちろん、それをされても私たちは文句は言えない。でも、聖書が示される神様とは、そういうお方なのです。ですから私たちは、私たちのことを知り尽くし赦して下さるこの方の前では正直になれるし、自分に固執しないで、正直になるべきです。私はこの事を思い巡らしている時に、あの「砂浜の足跡」（Footprints）という詩を思い起こしました。

―私は夢の中で、自分の人生が映し出される景色を見た。それは私が主と共に海岸を歩いている夢だった。砂浜には二つの足跡がついていた。しかし、ある所に至ると砂浜には足跡が一人分しかない。主は私から離れ去ってしまったのか。わたしを独りぼっちにしておかれたのか。…その時に天から声が響いた。「私の愛する子よ、私はお前を愛しているし、あなたを離れることはなかった。あなたが独り分しか足跡を見つけることが出来なかったのは、歩けなくなったあなたを背負っていたからなのだよ」と―。私は、これは十字架の真実だと思います。私が歩いていたのではなく、主が私自身を、私自身の罪を、その身に背負って神の国へと導いて下さっている。そのことを言っているのだと思います。

この世には試練があります。肉体的な衰えや弱さもあります。それこそ一人で歩けなくなることもあります。そして何より、私たちは不信仰な存在でしかありません。それでも、いや、主はそれだからこそ私たちを背負って下さるのです！そのためにこそ主イエスは来て下さったのです。そして、だから私たちはこのお方に従って行けるのです。

この「ローマ書」の5章の言葉、是非書いてみて下さい。覚えてみて下さい。きっと、私たちの心が、解放されて、何も飾らなくてよい、何も恐れる必要もない、そんな正直で自由な心になっている自分を発見すると思います。

―「（この）希望はわたしたちを欺くことがありません。わたしたちに与えられた聖霊によって、神の愛がわたしたちの心に注がれているからです。」 アーメン。

お祈り致します。

神様、今日のみ言葉をどうか、心の深い所で受け止めさせて下さい。この世での歩みはたやすくないことを私たちは知っています。しかし、苦難は忍耐を、忍耐は練達を、練達は希望を生むという、聖霊が下さる現実があることをいつも心に留め、私たちの具体的な生活を生きることが出来ますように。このひと月の歩みも主イエス様、あなたが先立ち、また支えて下さりながら歩ませて下さい。私たちの教会の歩みをも励まして下さい。主イエスの御名によって。アーメン。